研究ノート

リスボン地震と災害アーカイブ

水本　有香[1)]

要　約

ポルトガルは，1755年11月1日，キリスト暦の万聖節のミサの最中に起こったリスボン地震によって甚大な被害が発生した．被災者の救援，救助，被災からの復旧，復興，ひとびとの地震災害の思想などについて，被災直後から災害に関する資料が作成された．アジュダ国立図書館，ポルトガル国立公文書館は，地震発生から260年以上経ったリスボン地震に関する資料を所蔵している．それぞれのリスボン地震に関する資料がどのような種類の資料が整理，保存されているのか，多様な資料を所蔵するそれぞれのアーカイブにおいて，リスボン地震の資料コレクションが災害アーカイブとしていかに機能しつつ持続しているのか現状を述べる．

Key words：リスボン地震，災害，アーカイブ

はじめに

アーカイブとは，「日付，保存場所，形式および媒体を問わず，あらゆる自然人または法人により，および公的または私的なあらゆる業務部門または機関により，その活動の実施において作成または受領された，データを含む文書の総体である」とフランスの文化遺産法典で法的に定義されている[(1)]．

2010年9月，ICA円卓会議オスロ大会にて世界アーカイブ宣言は，「アーカイブは，意思決定，行動，記憶を記録する．アーカイブは世代から世代へ引き継がれる唯一無二にしてかけがえのない文化遺産である．アーカイブはその作成段階からそれ自身の価値と意味を保存するために管理される．アーカイブは説明責任の義務及び透明性ある行政経営活動の支えとなる，権威ある情報源である．アーカイブは個々人及び共同体の記憶を保護し，それに寄与することによって，社会の発展に重要な役割を担う．アーカイブへの自由なアクセスは，人間社会の知識を豊かにし，民主主義を促進し，市民の権利をまもり，生活の質を向上させる．」と採択した[(2)]．

また，「アーカイブズは，しばしば選択的に収集されてきた図書館資料や博物館・美術館の展示資料とは根本的に異なっている」，「一般的に「アーカイブズ」といえば，文書の保存・提供を行っている建物と，その組織の両方を指す」と定義している．日本においても，現状においてアーカイブは，「行政文書など組織体の文書や民間資料（古文書など）を包括したアーカイブ資料，文書館・公文書館・資料館を包括したアーカイブ施設」といえる[(3)]．

日本において，災害アーカイブの始まりは，大規模災害の記録を保存し，未来に伝えていくた

[1)] 神戸学院大学現代社会学部社会防災学科

め，1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災（地震名：兵庫県南部地震）に関する資料の収集，整理，保存活動である．その後，この災害資料を保存する活動は，2000年に発生した新潟県中越大地震，2011年に発生した東日本大震災に関する災害資料の保存活動につながっている．

ポルトガルの歴史において1755年のリスボン地震による被害は甚大なものであった．ポルトガル国内においてリスボン地震に関する資料はアジュダ国立図書館およびポルトガル国立公文書館（トーレドトンボ）に保存されている．260年以上前の災害資料がその他の大量かつ多様な資料とともに同じアーカイブに保存されているなか，いかに他の資料と共存しながら災害アーカイブとして機能するかを検討する．本稿は，リスボン地震の概要について，次に，アジュダ国立図書館および国立公文書館が所蔵するリスボン地震関連資料と災害アーカイブについて，最後に，リスボン地震の災害遺構等について述べた上で，ポルトガルにおける災害アーカイブのありかたについて考察する．

1．リスボン地震の概要

①地震発生前のポルトガル

地震発生前のポルトガルは，1580年に王位継承者が絶えて，スペインのフェリペ2世が即位して以後60年にわたりスペイン王の支配が続いた．1640年，カタルーニャの反乱をきっかけに起きた長期の際独立戦争を支えたのは植民地であるポルトガルの砂糖経済であった．砂糖経済は，1670年代に終わるが，20年後にブラジル内陸部で発見された金がポルトガルの経済を支えた．1750年，スペインとの間にマドリッド条約を締結し，今日とほぼ同じブラジル領土が確定した．ポルトガルはブラジルに対する植民地支配を強化することによって，ブラジルから流入する金や熱帯植民地物産の富によってポルトガルではジョアン5世（ポルトガル王，在位1706-1750）や貴族たちは大邸宅や教会の建造に費やした[(4)]．

リスボン（ポルトガル語でLisboa）は，エストレマドゥーラ地方に位置する．イスラム教徒の支配するイベリア半島を解放しようとするキリスト教徒の運動によって，711年のイスラム軍侵攻後始まり，1492年のグラナダ陥落で完了した国土回復運動（レコンキスタ）の過程で，「イスラム教徒と国境を接する最前線」を意味する地名として名付けられた．初代ポルトガル王アルフォンソ・エンリケスがリスボンをポルトガルの首都として，コインブラから遷都した．リスボンはテージョ川の河口から12キロメートル上流の北岸に開けた町である．リスボン市街地は急こう配の斜面一面に建築物が張り付いていた[(5)]．

②地震の発生

ポルトガルが被害を受けた地震は1755年11月1日のほか1356年，1531年も大地震が発生している．1755年11月1日，キリスト暦の万聖節のミサの最中に起こった大西洋沖合を震源として発生した地震は，沿岸部を中心にポルトガルは大きな被害を受けた．余震は翌年8月までに500回を数えた．規模にして，M8.5～M9.0前後とされている．震源地は，ポルトガルの西南西沖，約200キロの海底で，ジブラルタル海峡と地中海を結んだ線上に位置し，ヨーロッパプレートが近接しているアフリカプレートと衝突して海溝型地震を起こすアゾレス・ジブラルタル活断層地帯である[(6)]．1724年，1750年にも大規模な地震は発生していたが被害の大きさは1755年の地震の規模が一番大きなものであった．地震から約40分後，高さ6～20 mの津波がポルトガル南部から東のス

ペイン，モロッコなどアフリカ西海岸へ到達した．津波は，イギリス，ノルウェー，大西洋を横断して西インド諸島など大西洋全域へ3回にわたり押し寄せた．リスボンにはテージョ川をさかのぼって6 m～15 mの津波が押し寄せた．首都リスボンは大地震と津波，火災によりテージョ川に面した中心部の4分の3が壊滅状態となり，リスボンの全家屋の3分の2が居住不可能になったとされる．死者は1～2万人，あるいは4万人，それ以上になったと言われている．テージョ川に面した王宮を中心とする政府機関，教会，病院などの公共施設が倒壊，焼失した．それらが保存していた貴重な書籍，文書，芸術作品の多くも失われた．経済損失は当時の国内総生産の75％が失われた，あるいは被害総額が当時の国民総生産の1.5倍になるとされた[(7)]．

③地震からの復旧と復興

セバスティアン・ジョゼ・デ・カルヴァーリョ・エ・メロ（Sabastiao Jose de Carvalho e Melo），後のマルケス・デ・ポンバル（Marques de Pombal）侯爵（以下，ポンバル）はジョアン5世を継いだジョゼ1世（在位1750年-1777年）から震災復興に関して全権を委譲された．ポンバルはポルトガル国内の軍事技術者に災害復興の都市計画を任せた．ブラジルを対象にした独占会社を創設したり，金に対する税金を引き上げるなど植民地支配を強めた．しかし，リスボン地震によってリスボンが甚大な被害を受けたため，その復興資金に様々な税を新設して植民地からの収奪を強化した[(8)]．

ポンバルは，震災の翌年1756年5月，宰相に任命される．ただちにポンバルはリスボンの再建を計画する．1755年12月4日，工部卿マヌエル・ダ・マイア将軍から計画案を受けた．主な計画として

・街路を拡張し，新たな建物は3階建てに制限するほかは従来の市街を踏襲する．
・最も被害の甚大だったバイシャ地区に残っている建物はすべて取り壊し，新しい都市計画に基づいて再建する．
・壊れた家屋は家主に任せて，新たな首都はリスボンを離れて，ベレンの近くに再建する．

マイア将軍は，新首都を造る計画を押したが，国王あるいはポンバルは第2案を採用した．都市計画は，1666年の大火ののちに再建されたロンドンと，サルディニア王国の首都トリノが参考にされた[(9)]．復興に費やされた期間は約20年であった．

2．アジュダ国立図書館所蔵のリスボン地震資料

アジュダ国立図書館（Biblioteca da Ajuda）は，資料の保全，研究，普及を目的として，資料の豊富さに特徴があるポルトガルで最も古い図書館の一つである．図書館は1880年6月10日以来，アジュダ宮殿内に置かれ，一般に公開されている．図書館の起源は，15世紀にさかのぼり，王立図書館，近世の図書館としての歴史を有する．16世紀からパソ・ダ・リベイラ（リベイラ宮殿）の西塔に設置され，D.ジョアン5世（João V，1689年10月22日-1750年7月31日）の時代に拡張されたが，1755年のリスボン地震により蔵書のほとんどを失った．その後アジュダの木造宮殿（レアル・バラカ）に取り付けられた部屋に再び設置された．1755年の地震の後，大規模な資料の購入，コレクションの再構成が行われた際，D.ホセ（ジョゼ1世，José I，1714年6月6日-1777年2月24日）の時代であった．1811年，フランスの侵略に続いて，王室がブラジルに行くと，図書館はリオデジャネイロの裁判所近くに移され，現在の国立図書館の最初の核を形成した．1821年，王室

の写本だけがポルトガルに戻り，後にイエズス会の図書館（サン・ロケ教会とサントアンタン大学）とオラトリオ会とネセシダーデス宮殿の図書館が加わった．図書館は1910年に共和国が宣言されるまで王室によって直接管理され，その司書は君主によって任命された．リオデジャネイロに残っている約6億冊は，リオデジャネイロ国立図書館を生み出した．1910年以来，アジュダ図書館は文化を担当する多くの異なる国務省の管轄下に置かれた．2012年，アジュダ図書館はアジュダ宮殿の管轄となり，アジュダ宮殿は文化遺産総局の部門に入った．

アジュダ国立図書館の所蔵資料は，非常に重要な遺産的価値を有しており，手書き資料と印刷物で合計約15万種，3 kmの棚延長になる．その後，いくつかの民間アーカイブと修道会のアーカイブのほか，公的機関のアーカイブが加えられ豊かになった．写本コレクションには，重要な年代記のコレクション（15～18世紀）に加えて，43の装飾写本，台本と地図帳，聖書，歴史的および文学的なものを含む，2,512の古書と約33,000の個別の文書（13～20世紀）がある．アジアのイエズス会の61の写本は，東洋（18世紀）の歴史の基礎資料となっている[(10)]．

リスボン地震は，書簡やパンフレット類などを通じてヨーロッパ全土に伝えられ，様々な反響を引き起こした．地震の原因が神の摂理に帰されたり，その一方で，地震を科学的に理解しようとする試みから，近代的地震学の始まりともされている．

アジュダ国立図書館が所蔵する本稿の対象であるリスボン地震に関する資料をオンライン蔵書目録において検索した際（図1），「Terremoto de 1755」-0件，「Terramoto de 1755」-116件，「Terramoto」-177件である．

アジュダ国立図書館が所蔵する資料の書誌情報，所蔵情報の項目は表1のとおり，題名，著者，出版年，寸法，注記，主題，出版地，参考，配架場所の情報が登録されている．

検索結果の資料の書誌情報には，Assuntos（主題）に，「Terramoto」（地震），「Terramoto de 1755」（1755年地震）あるいは，「Lisboa-Terramoto de 1755」（リスボン-1755年地震）の情報が含まれる（図2）．題名のなかにリスボン地震が含まれていない資料であっても，主題などのメタデータの要素のいずれかにあらかじめ決めた定型のキーワードを入れることにより，大量かつ多様なデータベースからリスボン地震関連資料のみを抽出することが可能となる．これはアジュダ国立図書館のみの取り組みではなく，世界的に多くの図書館や文書館などが採用しているダブリンコアメタデータ記述に基づく．

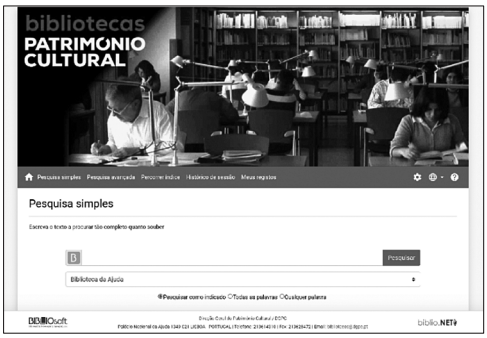


図1　アジュダ国立図書館ホームページ

表1　アジュダ国立図書館の書誌情報，所蔵情報項目

項目	日本語訳
Título:	題名
Autor(es):	著者
Publicação:	出版
Descrição física:	寸法
Notas:	注記
Assuntos:	主題
Localização geográfica da publicação:	出版地
Veja também:	参考
Localização:	配架場所

出典：アジュダ国立図書館（筆者作成）

表2の資料のように，アジュダ国立図書館が所蔵するリスボン地震関連の資料は題名に「terremoto（地震）」の単語が含まれることが多い．ポルトガルは大地震が数回発生している．同じ「地震」を意味する「Terramoto」と「terremoto」が両用されている．「Terramoto」はポルトガルでよく使われ，「terremoto」はブラジルでよく使われるという説があるが，筆者がアジュダ国立図書館に問い合わせたところ，「両方『地震』という意味の単語だから両方使う」と回答を得た．ただし，アジュダ国立図書館所蔵のリスボン地震関連資料は，「terremoto」は題名（Título）のみに含まれており，「Terramoto」は主題（Assuntos）のみに使用される．

アジュダ国立図書館が所蔵するリスボン地震関連「Terramoto de 1755」-116件のうち，重複分をのぞくと65件である．65件の資料の作成年および分野，出版地については，リスボン地震が発生した1755年から1765年にわたる．出版地は半数以上がリスボン，8件が出版地不明，7件がセビーリャ，コインブラとマドリードが各5件，サラマンカとサンタマリア港が各1件となっている．

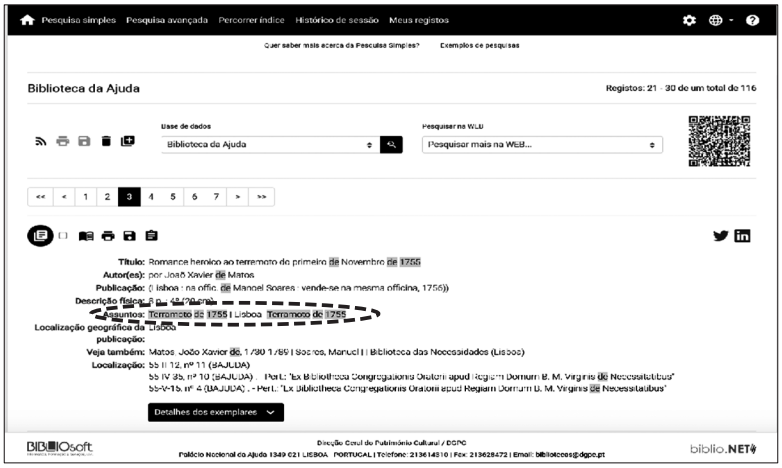


図２　「Terramoto de 1755」検索結果の一例

表２　アジュダ国立図書館の資料書誌情報の一例

Título:	Precauçoe[n]s medicas contra algumas remotas consequencias, que se podem excitar do terremoto de 1755	題名	1755年の地震によって起こりうるいくつかの遠隔的余波に対する医学的予防措置
Autor(es):	carta que á...Senhora Dona Leonor de Tavora, Marqueza de tavora, escreve Joseph Alvarez da Silva	著者	ジョセフ・アルヴァレス・ダ・シウヴァがドナ・レオノール・デ・タヴォーラ、マルケザ・デ・タヴォーラに宛てた手紙。
Publicação:	(Lisboa : na officina de Joseph da Costa Coimbra, 1756))	出版	リスボン：ジョセフ・ダ・コスタ・コインブラの事務所。1756年。
Descrição física:	28, [4] p. ; 4° (20 cm)	寸法	28ページ。20センチ。
Notas:	Carta datada do seu Palácio do Campo Pequeno de Lisboa , de 16 de Março de 1756	注記	1756年3月16日にリスボン市のカンポ・ペケーノ宮殿にて書かれた。
Assuntos:	Terramoto de 1755 | Medicina | Lisboa--Terramoto de 1755	主題	1755年の地震。医学。リスボン・1755年の地震
Localização geográfi	Lisboa	出版地	リスボン
Veja também:	Silva, José Álvares da | Rocha, José Monteiro da, 1734-1819 | Coimbra, José da Costa | Távora, Leonor de, 1700-1759, Marquesa de Távora | Biblioteca das Necessidades (Lisboa)	参考	ジョゼ・アルヴァレス・ダ・シウヴァ。ジョゼ・モンテイロ・ダ・ローシャ、1734-1819。ジョゼ・ダ・コスタ・コインブラ。レオノール・デ・タヴォーラ、1700-1759、タヴォーラの公爵。ネセシダーデス図書館（リスボン）
Localização:	55-II-7, nº 14 (BAJUDA) . - Pert. ms.: "Rocha"	配架場所	55-II-7，14番（アジュダ図書館）所蔵：ローシャ
	55-IV-37, nº 6 (BAJUDA)		55-IV-37，6番（アジュダ図書館）
	55-V-9, nº16 (BAJUDA) . - Pert.: "Ex Bibliotheca Congregationis Oratorii apud Regiam Domum B. M. Virginis de Necessitatibus"		55-V-9，16番（アジュダ図書館）所蔵：バージニア・デ・ネセシダーデ王室礼拝会衆図書館

出典：アジュダ国立図書館（筆者作成）

前述した65件の資料の題名を日本語に翻訳し，自然言語解析の手法を使って，文章を単語（名詞，動詞，形容詞等）に分割し，それらの出現頻度や相関関係を分析することで有益な情報を抽出するテキストマイニングの手法を使用して資料の傾向を分析した（図3，図4）.

キーワードの登場頻度，特異性などを文字の大きさを示す「ワードクラウド」で特徴を可視化すると，名詞は，「1755年」，「11月1日」，「リスボン」，「地震」，動詞は，「起きる」，「起こる」，「嘆く」，形容詞は，「新しい」，「興味深い」，「恐ろしい」の順に頻出していた．この特徴は資料の書誌情報のうち，主題に大きく反映されている．また，「道徳」および「説教」，「神」，「哲学的」など宗教的な単語とともに，「物理的」に地震の原因や兆候に関する資料が含まれることからリスボン地震の災害アーカイブは，当時の宗教的な影響を持つ災害資料だけではなく，地震学に関する災害資料を所蔵していることがわかる.

アジュダ国立図書館は，多種多様な主題を持つ資料を所蔵をしているが，リスボン地震関連資料の書誌情報のうち，主題を「リスボン地震」と情報を整備することにより，災害アーカイブを内包することが可能となる.

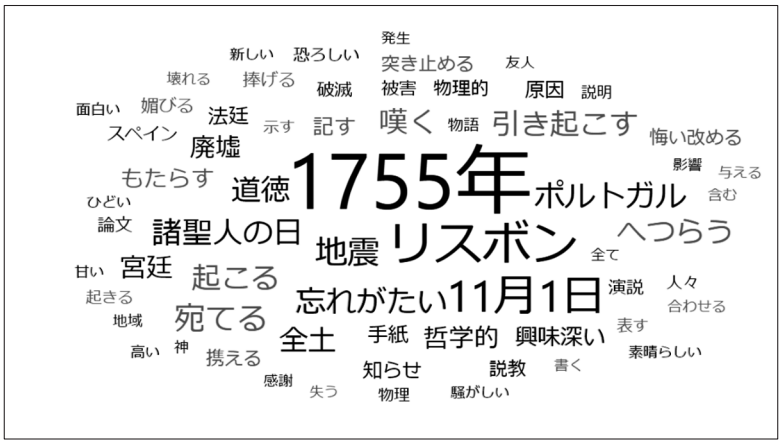
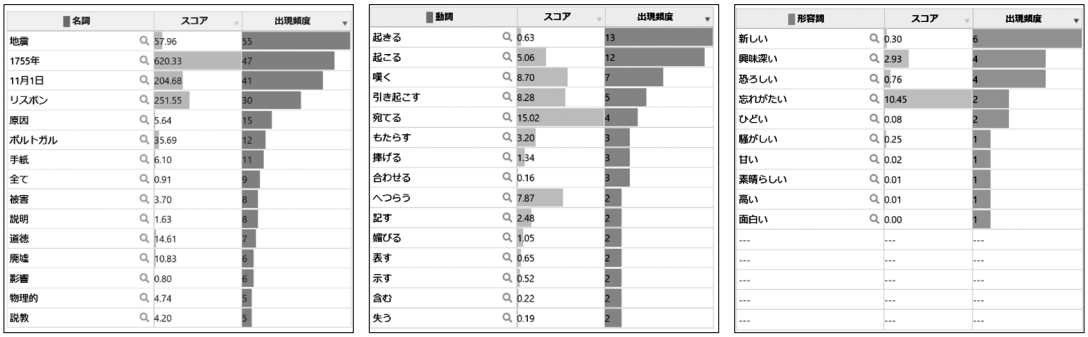


図３　頻出単語の可視化



名詞	スコア	出現頻度
地震	57.96	55
1755年	620.33	47
11月1日	204.68	41
リスボン	251.55	30
原因	5.64	15
ポルトガル	35.69	12
手紙	6.10	11
全て	0.91	9
被害	3.70	8
説明	1.63	8
道徳	14.61	7
廃墟	10.83	6
影響	0.80	6
物理的	4.74	5
説教	4.20	5

動詞	スコア	出現頻度
起きる	0.63	13
起こる	5.06	12
嘆く	8.70	7
引き起こす	8.28	5
宛てる	15.02	4
もたらす	3.20	3
捧げる	1.34	3
合わせる	0.16	3
へつらう	7.87	2
記す	2.48	2
媚びる	1.05	2
表す	0.65	2
示す	0.52	2
含む	0.22	2
失う	0.19	2

形容詞	スコア	出現頻度
新しい	0.30	6
興味深い	2.93	4
恐ろしい	0.76	4
忘れがたい	10.45	2
ひどい	0.08	2
騒がしい	0.25	1
甘い	0.02	1
素晴らしい	0.01	1
高い	0.01	1
面白い	0.00	1
---	---	---
---	---	---
---	---	---
---	---	---
---	---	---

図４　各単語の出現頻度

3．ポルトガル国立公文書館所蔵のリスボン地震資料

ポルトガル国立公文書館トーレドトンボ（Torre do Tombo）は，ポルトガルで最も古い機関の一つである．トーレドトンボはリスボンの城の塔の一つに設置されて以来，D.フェルナンドの治世に設立され，最初の記録に残っている文書の日付は1378年から1755年まで，王や家臣のアーカイブとして機能し，王国の管理と海外の所有物，また他の王国との関係から生じた文書を保管した．現在のアーカイブと同様の機能を備えた行政サービスを提供することに加えて，公文書館が提供する最も重要なサービスは，個人や機関から請求された文書のサービスであった．17世紀に入り，アーカイブは登録が始まると組織化されはじめ，目録化が行われた．18世紀には請求される資料の増加により，職員数が増加した．文書の利用を促進するため，多くの資料の目録化が進められた．目録化作業は城で始まり，首相，法律や条例，王宮に居住するひとびと，教皇などに関する文書の目録が作成された．

写真１　ポルトガル国立公文書館外観

1755年11月1日，地震で塔が倒壊した．文書は瓦礫から収集され，11月6日付けのポンバルの許可を受けて，アルマス広場に建てられた木製のテントに一時的に保管された．1757年8月26日，27日，聖ベネディクト修道院の建物の一部に移され，公文書館の職員は，文書の複製物の作成や文書の要約や索引の作業を続けた．当時の資料の一部は今日でも閲覧することができる[(11)]．

ポルトガル国立公文書館の目録検索システム（https://digitarq.arquivos.pt/）にて，キーワード「リスボン地震（Terramoto de 1755, Terremoto de 1755）」で検索すると，「Terramoto de 1755」-328件，「Terremoto de 1755」-3件の結果となる．

検索結果から，表3のとおり資料種別（DESCRIPTION LEVELS），資料作成年月日（DATES），デジタル化作業（DIGITAL REPRESENTATION）においてさらに条件を加えて絞り込むことができる．それぞれの文書は表4のとおりメタデータを付与されている．

資料種別を例にリスボン地震関連資料を挙げる．

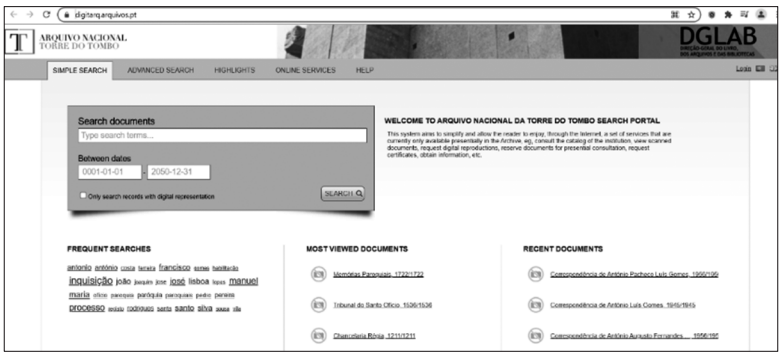


図５　ポルトガル国立公文書館資料検索ページ

表３　検索結果の絞り込み条件

DESCRIPTION LEVELS（資料階層）	Collection	コレクション
	Fonds	資料群
	Section	部門
	Series	シリーズ
	Installation Unit	一式
	File	ファイル
	Item	個別資料
DATES（資料作成年月日）	0000-0404	0000年から404年
	0404-0808	404年から808年
	0808-1212	808年から1212年
	1212-1616	1212年から1616年
	1616-2021	1616年から2021年
DIGITAL REPRESENTATION（デジタル化作業）	With representation	済
	Without representation	未済

出典：ポルトガル国立公文書館（筆者作成）

表４　文書のメタデータ

TITLE	資料名
DESCRIPTION LEVEL	説明レベル
REFERENCE CODE	請求番号
TITLE TYPE	資料名種別
DATE RANGE	年月日
DATE RANGE	年月日
DESCRIPTIVE DATES	記述的日付
DIMENSION AND SUPPORT	資料サイズ、様式
EXTENTS	範囲
BIOGRAPHY OR HISTORY	来歴、歴史
CUSTODIAL HISTORY	保存の歴史
ACQUISITION INFORMATION	資料収蔵情報
SCOPE AND CONTENT	範囲、内容
APPRAISAL INFORMATION	評価情報
ARRANGEMENT	整理
ACCESS RESTRICTIONS	アクセス制限
CONDITIONS GOVERNING USE	使用制限条件
OTHER FINDING AID	その他参考
ALTERNATIVE FORM AVAILABLE	代用の入手方法
RELATED MATERIAL	関連資料
PUBLICATION NOTES	出版情報
PHYSICAL LOCATION	資料保存場所
ORIGINAL NUMBERING	元の資料番号
LANGUAGE OF THE MATERIAL	資料の言語
PHYSICAL CHARACTERISTICS AND TECHNICAL REQUIREMENTS	物質的特徴および技術要件
TYPE OF CONTAINER	箱種別
NOTES	注
CREATION DATE	資料データ作成年月日時間
LAST MODIFICATION	資料データ更新年月日時間

出典：ポルトガル国立公文書館（筆者作成）

①個別資料名に「1755 年地震」が含まれる場合

資料名「REQUERIMENTO DO PRIOR E BENEFICIADOS DA IGREJA DE SÃO NICOLAU DE LISBOA SOBRE A RECONSTRUÇÃO DA IGREJA, APÓS O TERRAMOTO DE 1755」

本資料は，資料階層のうち「DOCUMENTOS DE D. CARLOS, D. AMÉLIA E D. MANUEL II」（D.カルロス，D.アメリア，D.マヌエル２世文書）コレクションに属し，「COLECÇÃO DE DOCUMENTOS DO REI D. CARLOS」（キング・カルロスの文書群）一式に含まれる資料であることが表示される．

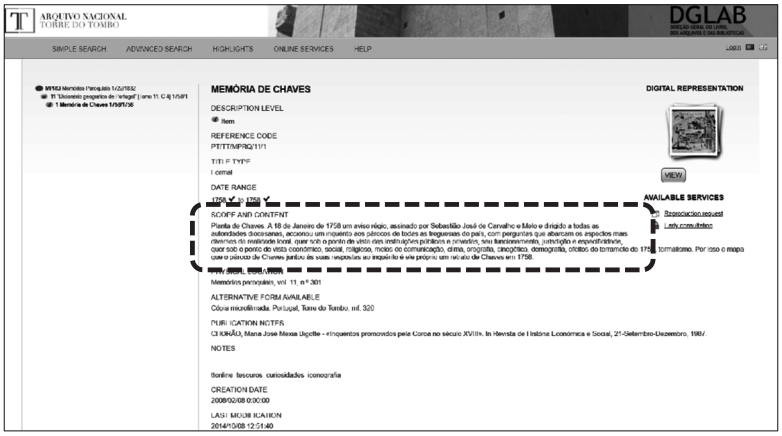


図６　資料「MEMÓRIA DE CHAVES」の資料詳細ページ

デジタル化作業が行われた資料は，WEB上でJPEG形式，TIFF形式のファイルを閲覧，ダウンロードすることが可能である．

②個別資料名に「1755年地震」が含まれない場合

資料名「MEMÓRIA DE CHAVES」

本資料は，資料階層のうち「MEMÓRIAS PAROQUIAIS」（教区の記憶）コレクションに属し，「DICIONÁRIO GEOGRÁFICO DE PORTUGAL [TOMO 11, C 4]」）一式に含まれる資料であることが表示される．コレクションおよび一式の資料の詳細情報には「1755年地震」の記述はない．個別資料「MEMÓRIA DE CHAVES」の詳細情報「SCOPE AND CONTENT」に1758年1月18日，セバスティアン・ジョゼ・デ・カルヴァーリョ・エ・メロ（ポンバル）が国のすべての教区の教区司祭への問い合わせをおこない，人口統計，気候などに加えて1755年の地震の影響（efeitos do terramoto de 1755）を記述した資料があるため．

具体的には，地震発生後，全国的な地震と被害状況の調査を行う目的で，国内の全40教区と太平洋上のポルトガル領の島々に質問状を送付した．地震，津波，火災の発生状況とそれらによる被害状況，さらに救援活動の実態を調べる13項目の質問から構成された．

質問は，地震について，「地震は11月1日の何時に発生し，どれぐらい続いたか」，「揺れはどの方向に強かったか」，「建物が崩れた側はどちらか」，「地面に亀裂は出来たか，新しい泉は出来たか」，「過去の地震を体験したか，その被害の状況はどうか」である．津波について，「海，泉，川に何が起こったか」，「最初に海面は上昇したのか，それとも引いたのか，それは通常からどの程度上昇したのか，異常な上昇と引き潮を何回見たか，その時間はどのぐらいか」である．火災について，「火災が発生しておれば，どのぐらい燃えていたか，その被害はどうか」である．被害について，「死者はどのくらいか，そのなかに著名な人はいるか」，「教区内での生存者はどのくらいか，できる限り報告せよ，その性

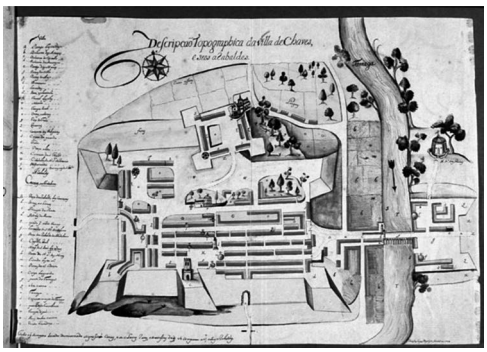


図７　資料「MEMÓRIA DE CHAVES」一部

別はどうか」,「教区内で崩壊した建物はどのくらいか，そのなかに著名な建物はあるか，残っている建物の状態はどうか」である．救援活動について，「食料は不足していないか」,「聖職者，軍隊，政府は地震直後にどのような措置をしたか」である[(12)].

③個別資料名に「1755 年地震」が含まれない場合「CLAMOR JUSTIFICADO」

本資料は，資料階層のうち「MANUSCRITOS DA LIVRARIA」(書店の原稿) コレクションに属し，「PAPÉIS VÁRIOS」(様々な論考) 一式に含まれる資料であることが表示される．コレクションおよび一式の資料の詳細情報には「1755年地震」の記述はなし．個別資料「「LAMOR JUSTIFICADO」の詳細情報「NOTE」(備考) に「テキストは1755年の地震に言及」があるため.

アジュダ国立図書館が所蔵するリスボン地震関連の資料は，オンラインデータベースの題名 (Título) あるいは主題 (Assuntos) に「リスボン地震」がキーワードとして整備されていた．整備後は，多種多様な資料を所蔵，登録しているオンラインデータベースのなかで，リスボン地震に関する資料を検索することが可能となる．対して，ポルトガル国立公文書館が所蔵するリスボン地震関連の資料は，多層的な資料階層をもつ．一点ずつの個別資料 (Item) がリスボン地震に関する内容を含んでいる場合とコレクション (Collection)，資料群 (Fonds)，部門 (Section)，シリーズ (Series)，一式 (Installation Unit)，ファイル (File) は，オンラインデータベース上の取り扱いに注意が必要となる．個別資料ではなく複数点の資料を含むコレクションなどの場合，すべてがリスボン地震関連の資料ではなく一部のみが関係している．そのため，資料名 (TITLE) に「リスボン地震」が付いていない資料に関して，各資料のメタデータには，資料の来歴 (BIOGRAPHY OR HISTORY)，あるいは資料の内容 (SCOPE AND CONTENT) の項目に，キーワード「リスボン地震」の整備が必要となる.

4．リスボン地震の災害遺構

地震発生から260年以上を経過したリスボン市内には，現在でも災害遺構などが保存されている.

①ジェロニモス修道院（Mosteiro dos Jerónimos）

ジェロニモス修道院は，リスボンのテージョ川沿岸，ベレン地区にあるマヌエリノ様式の修道院である．16世紀半ば，マヌエル1世がエンリケ (航海王子) の偉業に敬意を表し，約30年の歳月をかけて建造した．建築にはディオゴ・ボイタクのほかジョアン・デ・カスティーリョらスペイン人も参加した．南門，回廊，中庭の柱などをはじめ，修道院全体に繊細な彫刻が施され，石灰岩からなる白亜の建物とともに優雅で洗練されたマヌエリノ様式を代表している．インド航路発見により巨額の富を築き上げたポルトガル大航海時代の輝かしい歴史を伝える建造物となっており，王家の霊廟として国王マヌエル1世が埋葬されている．1983年ベレンの塔とともに，世界遺産の文化遺産に登録された．マヌエル1世が築いた王宮は，リスボン地震で倒壊

写真２　ジェロニモス修道院の南門

したが中心部から少し離れた場所にあるジェロニモス修道院は大きな被害を免れた．

写真３　カルモ教会

②カルモ教会（Igreja do Carmo）

カルモ教会は，1389年にシアード地区に建てられたゴシック様式の教会．14世紀の建設当時はリスボン最大のゴシック様式の教会だったが，1755年の大地震で崩壊し，廃墟のまま残されている．隣接する旧修道院は20世紀に再建され，現在は博物館になっている．

③ Rua dos Cegos の住宅

リスボンのアルファマ地区のルアドスセゴスにある家は16世紀に建てられ，1755年の地震に耐えた建物のうちの一つで，Rua dos Cegosにある．アルファマ地区は他の地区と異なり，地震の再建計画が実施されず，規制されていないさまざまなスタイルの建築物に囲まれている．

写真４　Rua dos Cegosの住宅

④バイシャ再開発地区（Baixa Pombalina）

リスボンの都市計画のなかで，バイシャ地区で実施された耐震性の高い建物の建築による再開発は，ポンバル様式建築（ポンバリーナ）を採用した．建築物の構造は，地震に対しても倒壊しないように，主構造は木製籠型フレームに要所に筋交いをいれて，三角形枠組みを形成した．この木組み構造は鳥かご（ガイオラ，Gaiola）と呼ばれた．本様式の採用は，地震発生から1か月で提案されて，公共の広場で軍隊によって実物大模型の耐震性の試験が実施された．バイシャ地区の主要道路に沿って建つ建築物は，4階建てである．地上階は商店，

写真５，６　バイシャ地区の建築物

2階以上は居住用として用いられた．2階にはバルコニー，3階には窓を設け，4階の屋根は寄棟屋根とした．建築物の外装は，黄土色の壁に塗られ，窓やドアが規格化された[13]．

⑤アズレージョ（タイル）

アズレージョはポルトガルを代表する伝統工芸である．言語的な由来は，アラビア語の「小さな磨かれた石」である．藍色のタイル・モザイクの流れをくむスペイン経由で伝わった建築用装飾資材（陶器）である．アズレージョ―がポルトガルで建築用資材として本格的に製作され始めたのはスペイン王フェリペ2世がポルトガル王フェリペ1世として即位していた1580年から1640年といわれる．それ以前はスペインのセビーリャやマラガで焼かれたものが持ち込まれ，教会や宮殿の装飾に使われていた．17世紀後半には，ポルトガルの特徴を生かした数十枚から数百枚のアズレージョで構成される宗教画や戦争画が焼かれるようになった．1755年のリスボン地震後，再建時に建てられた地味で簡素な建物を，次々とアズレージョで装飾したため復興事業のなかで，建築物の外壁を飾るアズレージョの生産が増えた．現在でも，白い壁に藍色が映えるアズレージョが教会，修道院だけではなく，公共施設や一般の住宅等にも使われている[14]．

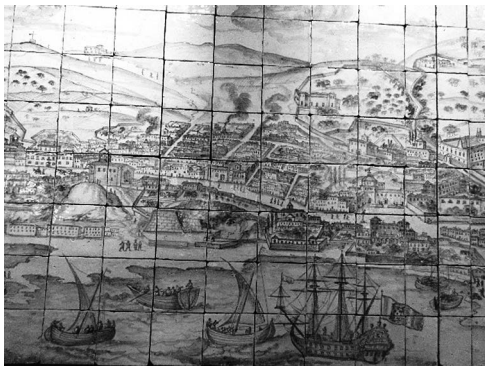


写真7　アズレージョ
（大地震前のリスボンの街並み再現）

5．リスボン地震関連の災害アーカイブ

日本において発生から11年あまりが経過した東日本大震災の資料は，それまでの一次資料の保存活動だけではなく，収集対象をはじめから実物資料ではなく，写真や映像，SNSなどデジタル資料のみを対象としたデジタルアーカイブ活動が発災直後から盛んに行われた．被災した自治体だけではなく，研究機関，法人，企業，市民団体などが数多くの災害デジタルアーカイブを設置した．立ち上げられた災害アーカイブは，データベースの形態として主に二種類に分けられる．一つ目は，発生した災害に特化したデータベースを新規で設置する単独型，二つ目は，既存のデータベースの枠組み，メタデータへ災害アーカイブを組み込んだ既存型である．災害アーカイブは，前述のアーカイブ，アーカイブズの定義を内包しつつ，遥かに上まわる大量且つ多様な資料を捉える．

アジュダ国立図書館およびポルトガル国立公文書館におけるリスボン地震の災害アーカイブは，上述のデータベースの単独型および既存型の形態のうち，すでに存在するデータベースの枠組み，メタデータへ災害アーカイブを組み込んだ既存型である．最初から特定の災害の資料を収集し，特定の災害に関する資料のみの資料で形成される単独型の災害アーカイブとは資料の収集方法などが異なる．上述したとおり，各オンラインデータベース上の整備は必要となるが，他の大量かつ多様な資料と災害アーカイブが同じアーカイブ内で共存，共創することによって，リスボン地震の災害アーカイブは，既存のアーカイブの機能は保持しつつ（機能性），アーカイブが閉鎖されることなく継続的に資料収集し（持続性），メタデータを整備することで利用者に益する（利便性）．さらに，災害アーカイブのみならず，現地で災害遺構が保存されていることから，リ

スボンのまち全体が災害アーカイブの役割を果たしている.

文中の写真は筆者撮影.

本研究はJSPS科研費JP18K12004の助成を受けたものです.

注

（1）ブリュノ・ガラン『アーカイブズ―記録の保存・管理の歴史と実践』白水社，2021年2月，7-8頁.
（2）全国歴史資料保存利用機関連絡協議会http://www.jsai.jp/file/japanese.pdf　International Council on Archives（以下，ICA）は，1948年に設立されたアーカイブズの国際機関である.
（3）白井哲哉『災害アーカイブ―資料の救出から地域の還元まで』東京堂出版，2019年，p.220.
（4）村上義和ほか『ポルトガルを知るための55章【第2版】』明石書店，2011年10月，p.50.
（5）村上義和ほか，同上，p.240.
（6）村上義和ほか，同上，p.50.
（7）村上義和ほか，同上，pp.242-243.（公財）ひょうご震災記念21世紀研究機構研究調査本部『リスボン地震とその文明史的意義の考察調査研究報告書』p.5，2015年3月，（公財）ひょうご震災記念21世紀研究機構研究調査本部，p.5.
（8）村上義和ほか，同上，p.51.
（9）金七紀男「6　リスボン大地震と啓蒙都市の建設」『JCAS連携研究成果報告8』p.174.
（10）アジュダ国立図書館https://bibliotecaajuda.bnportugal.gov.pt/historia.htm（2021年9月28日アクセス）
（11）ポルトガル国立公文書館https://antt.dglab.gov.pt/inicio/identificacao-institucional/6-2/（2021年9月15日アクセス）
（12）（公財）ひょうご震災記念21世紀研究機構研究調査本部，同上，pp.15-16.
（13）（公財）ひょうご震災記念21世紀研究機構研究調査本部，同上，pp.28-29.
（14）村上義和ほか『ポルトガルを知るための55章【第2版】』明石書店，2011年10月，pp.182-185.

参考文献

疇谷憲洋「ポンバル政権の成立について―リスボン大地震の政治的影響―」『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』第49巻，大分県立芸術文化短期大学，2012年，pp.31-41.
疇谷憲洋「同時代印刷物から見たリスボン地震（1755年）への反応と対策」『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』第52巻，大分県立芸術文化短期大学，2015年，pp.123-136.
重見晋也「リスボン地震に見る文学の想像力―天災と人災を超えて―」『名古屋大学人文学研究論集』第1号，名古屋大学人文学研究科，pp.1-10.